

論文

# 「牛疫」から見た戦時期中国占領地政策の実態 —台湾拓殖株式会社の海南島事業を中心に—

岡崎 滋樹

Rinderpest and The Taiwan Development Company's Hainan Island Industrial  
Management

OKAZAKI Shigeki

## 要 旨

本稿では、台湾拓殖株式会社の海南島事業を例に、牛疫が戦時期の軍部と国策会社を中心とした資源獲得に如何なる影響を与えたのかを検証する。1941年8月から海南島南部で拡大した牛疫は、台拓が抱えていた組織の問題、つまり「人災」という側面も看過できなかった。現場社員の内部告発によって明らかになる状況記録からは、軍部と台湾総督府および台拓の間で構築されていた特殊な関係性、不都合な事実の隠蔽、そして拡大防止過程や新防疫計画策定過程から垣間見える政治的意向など、組織ぐるみの諸問題が判明する。牛疫に翻弄される台拓の事業経営には、本来優先されるべき科学や技術が政治の力に抹殺されるという、会社組織の失敗の本質があった。

## キーワード

台湾拓殖株式会社 海南島 牛疫 人災 失敗の本質

## 目 次

はじめに

I. 台拓事業を牽引する現場社員と牛疫発生

II. 牛疫発生の原因追及

III. 牛疫拡大と会社の対応

おわりに

謝辞

注

文献

## はじめに

これまで、人類の社会経済活動に甚大な影響を与える牛疫については、山内一也によってその脅威と撲滅過程の世界史的考察が進められてきた<sup>1)</sup>。また、日本の戦時期における牛疫問題については、生物兵器開発の枠組みで、陸軍登戸研究所と朝鮮総督府家畜衛生研究所による散布用乾燥粉末病毒研究が高い関心を集めてきた<sup>2)</sup>。もちろん、牛疫の脅威は中国占領地経営においても同様であり、とりわけ華南地域は気候・地理的条件から見ても感染拡大リスクが非常に高く<sup>3)</sup>、牛肉や牛乳などタンパク源の確保は簡単ではなかったことが容易に想像される。

海南島は、1939年2月10日から日本の陸海軍が本格的に上陸・占領を開始し、その後は多数の日系企業を動員して資源獲得が進められた。その中でも、国策代行機関たる台湾拓殖株式会社(以下台拓)は、その絶対的な地理的優位を生かして、早い段階から現地に続々と技術社員を派遣し、海南島での事業獲得に奔走する。海南島は、「畜類の宝庫」<sup>4)</sup>と言われるように、水牛や黄牛および豚を中心とする畜産資源が豊富で、台拓も現地の豊富な畜産資源を社益に変えるべく、軍部との癒着関係を構築しつつ関連事業に参入していく。

これまで、海南島における台拓の畜産・牧畜部門については、事業概要を整理したSchneiderや鍾、そして柴田の研究で紹介されている<sup>5)</sup>。これら先行研究では、国策協力と会社利益獲得との関連から事業経営の外郭が提示されるが、現場の細かい動きについてはなお不明な部分が多い。史料の制約もあり、依然として概要整理の域を脱してはならず、新たな史料の発掘・考察を通じた実証作業を積み重ね、鮮明な全体像を構築していかなければならない。台拓事業に関わる牛疫問題も注目されることはなかったが、それは戦時期日本の占領地政策の実態を探る上で、極めて重要な示唆に富んでいるのである。

台拓は、軍部との癒着を通じて畜産や牧畜事業への参入を果たすものの、1941年8月20日から自社の事業地を中心に牛疫が拡大し、甚大な被害を蒙ることとなる。この牛疫問題については、すでに筆者による初歩的考察を終えており、当時の被害状況や対応策の概要などを明らかにしている<sup>6)</sup>。しかし、この台拓事業を襲った牛疫拡大は、気候・地理的条件

や生態環境といった基本的な背景だけではなく、国策代行機関ゆえに生じる複雑な人為的要因も絡み合っていた。つまり、軍部と台湾総督府および台拓上層部の間で構築されていた「付度」関係や、それに起因する万が一の有事に備えた危機管理の欠如、そして有事の際の同調圧力を伴う隠蔽工作など、いわゆる組織の力が作用することによって生じた「人災」という側面である。

こうした組織の力が関わる複雑な問題については、前稿の初歩的考察では十分に解明できていなかった。そして、その後の史料調査や関係者を知る方々への訪問調査を経て、あらためて有事の際に矢面に立たされた現場社員の悲鳴や、彼等が語る組織ぐるみの失敗の本質が浮き彫りになった。したがって、本稿では、台拓の受命事業に甚大な被害を与えた牛疫について、組織や人間関係という側面から発生要因や新防疫計画作成過程を問い直し、可能な限り現場の動きを明らかにしていきたい。

## I. 台拓事業を牽引する現場社員と牛疫発生

### 1. <sup>いまご</sup>今後滋雄(1890年～1978年)という人物

今後滋雄<sup>7)</sup>は、1890年9月7日に当時の兵庫県美方郡射添村で生まれた(族籍平民、現兵庫県美方郡香美町)。彼は獣医・畜産の専門知識を学ぶために、1907年4月17日に大阪府立農学校予科に進学し、翌年4月17日に同校獣医科(後畜産科)に入学、1911年3月22日に畜産科を卒業する。ちなみに、後の戦時期に台拓嘱託社員として海南島へ派遣された西村巖も同科で学んでおり、今後と西村は同期卒業である<sup>8)</sup>。今後は大阪府立農学校を卒業すると、1911年12月1日に一年志願兵として騎兵第十連隊へ入隊し、翌年9月19日からは陸軍三等蹄鉄工長(第十師団獣医部)に昇進、同年11月30日には現役満期を迎える。その後は第十師団獣医部に籍を置き、1913年3月1日には陸軍一等蹄鉄工長に昇進、1915年3月8日には陸軍三等獣医に任じられた。そして、おそらく個人的な事情・意向や人材不足による勧誘等があったと思われるが、彼は内地を離れる決心をする。1916年3月3日からは台湾・台南庁農会技手に就き、新たなキャリ

アが始まる。

台南庁農会技手に就いたおよそ半年後の9月30日からは台南庁庶務課殖産係所属の技手となり、本格的に畜産行政の現場に携わっていく。その後、行政区改正に伴い1920年9月1日より台南州内務部勸業課所属の技手となり、1924年3月31日には陸軍二等獣医に昇進する。1928年1月4日からは台南州内務部勸業課畜産係長となり、現場を統括する立場になった。内地を離れて順調に台湾でのキャリアを形成していく中で、1929年4月18日には見事台湾産業技師(台南州内務部勸業課、高等官七等待遇)に昇進し、1937年12月27日には官吏現役時の最高評価となる高等官四等待遇技師となる。1938年9月7日には勲六等に叙されて瑞宝章を授かり(正六位)、台湾総督府からも信頼が寄せられる畜産技術者として確固たる地位を築いていた。

この通り、台湾でのキャリアは順風満帆であったかのように思われるが、じつは1927年にはデング熱に罹り、1930年頃にはマラリアにも悩まされていたという。1935年あたりからは不眠症に苦しみ、体調に一抹の不安を抱えていたとされる。体調が優れない中でも現場を支え続けていたが、1939年末からはついに心身の疲労を要因とする神経衰弱病が顕著になり、悪化する倦怠感や思考力の減退により勤務にも支障をきたしていたという。担当医の診断では、生命の危険に関わることはないが、完治の見込みがなく、安静と投薬治療が必要であった。かかる診断結果と本人の意向もあり、1940年5月16日付で台南州知事の石井龍猪を通じ、小林躋造総督宛で「退職願」を添えた免官書類を提出した。そして、総督府内での審議を経て、1940年6月7日に正六位から従五位に叙され高等官三等待遇によってこれまでの活躍を労われ、翌8日付で正式に官職を退いたのである<sup>9)</sup>。

しかし、先に触れた石井から小林総督宛に送付された退職関係文書には、「退職後台拓入社ノ上海南島へ赴ク予定」<sup>10)</sup>という内情が記されていることには注目してよからう。なぜなら、深刻な神経衰弱病で業務にも支障をきたすほどの心身状態であれば、酷暑の占領地・海南島ではなおさら負担が重いはずであり、軍政下の激務に耐えられるはずがない。見方を変えれば、これより前に海南島では業務拡大に伴い力のある技術者を必要としており、軍部や現地駐在社員から総督府あるいは台拓本社に人材派遣要

請が入り、地方技師の今後滋雄を送ることで調整していた可能性がある。もちろん、最終的には本人も覚悟の上で海南島行きを決めていたはずではあるが、神経衰弱病で依願免官というのはある種の理由づけであったとも思われる。台湾から人員を増派せざるを得ない状況下で、本人は軍部に忠誠を示し無理を承知で自ら手を挙げたのか、あるいは派遣要請に応じるために総督府や本社側が何度も彼を説得して強引に退職させたのか。これまで順調に積み上げてきたキャリアから一転し、あまりにも急な退職劇を考えると、些か疑問が残ろう。

## 2. 牛疫発生の概要

1939年2月10日に陸海軍が本格的に海南島に上陸すると、台拓は出資する関係会社「台湾畜産興業株式会社」から石森堅重・丸目長年・中谷宏を本社嘱託社員とし、1939年4月1日から約1ヶ月にわたり高澤壽(台湾総督府殖産局農務課技師、軍属)と柳本直士(台湾畜産会技師、総督府嘱託、軍属)に同行させ、実地調査を試みる。実地調査を行う間、台拓は高澤の助力も得ながら、海軍省・陸軍省・外務省の担当者からなる三省連絡会議に対し畜産事業の方策を提案し、事業参入に成功していた<sup>11)</sup>。そして、牧畜事業については、三省連絡会議の所管で軍関係者や受命企業代表者が集う農政委員会の第2回会合が1939年9月23日～25日の日程で海口総領事館にて開かれ、そこで同委員会の「黙許ニ基キ」<sup>12)</sup>、台拓は陵水・新村・籐橋一帯の土地を付与される(図1参照)。台拓は、会合を経て後藤北面を班長とする調査隊を派遣し、同年10月下旬から約1ヶ月かけて現地調査を行い<sup>13)</sup>、牧畜事業の計画案も策定し<sup>14)</sup>、翌年6月に今後滋雄を担当社員として迎えたのである。

先に見た通り、今後滋雄の海南島赴任経緯については疑問も残るが、彼は官職を離れた後の1940年6月14日に台拓へ入社する<sup>15)</sup>。同日に陵水事務所勤務を命じられるが、「発令通知」には6月末の渡航まで南支課で事務打ち合わせをする旨が記される。台南州職員を退職後、台北本社で現地事情の確認や業務引継ぎ、必要とする人員選考等について上層部と調整をし、月末前後に渡航したのであろう。そして、渡航後は南部の籐橋で上層部と連携を図りながら事務所開設準備に携わり、9月1日に籐橋畜産事務所長



に就いた<sup>16)</sup>。その後は、事業現場を統括することになるが、1941年8月20日から牛疫拡大の悲劇に見舞われることになる。牛疫発生後の1941年10月1日に彼は籐橋牧場長兼新村分場主任を命じられ<sup>17)</sup>、感染拡大が止まらない厳しい状況下で、現場の最前線に立たされて事故処理を担うのである。

既述の通り、牛疫発生の経過についてはすでに別稿にて検証しているが、ここであらためてその様子を確認しておく。海南島での牛疫は、前掲の高澤と柳本による報告<sup>18)</sup>、そして1940年12月21日から視察を行った加藤浩(台北帝国大学理農学部助教授)の報告<sup>19)</sup>などで、その危険性が伝えられていた。諸説あるが、海南島では獣疫が「2～3年乃至3～4年に一回大流行を見る」<sup>20)</sup>とされ、また牛疫は「地方的には常に散発する」<sup>21)</sup>と言われ、家畜飼養管理の近代化が遅れている背景もあり、調査に関わった技術者たちからは常に注意喚起がなされていた。実際に、占領後には1939年秋頃から1940年6月までの間に島内で牛疫が発生しており、斃死頭数は6,000頭を超える惨状であったことが報告されている<sup>22)</sup>。

台拓が事業地を構える三亜農林事務所では、1941年8月20日に使役牛1頭が牛疫で斃死したとされる事例が確認され、片上義男技手から本社出張中の今後滋雄に急報が入った。罹患牛は、「口粘膜の潮紅赤色侵蝕性潰瘍の発生血液を混ずる水瀉下痢を来し飲思食欲反芻停止流涙多量にして虚脱し起立不能に陥り失禁自利」する症状が見られ、「概ね二日内外

を以て斃死」<sup>23)</sup>していたという。解剖検査や血清確保に追われる中で、11月11日からは第二波が始まり、籐橋や新村の事業地にも拡大していく。今後滋雄の報告によると、籐橋では飼育黄牛539頭のうち504頭が罹患して182頭が斃死し、水牛は同じく31頭中27頭が罹患して24頭が斃死していた。新村では、黄牛307頭のうち290頭が罹患して206頭が斃死し、水牛36頭すべてが罹患して22頭が斃死していたとされる<sup>24)</sup>。平均すると、罹患率が93.9%で、斃死率は47.5%であり、ウイルスの感染力が相当に強かったことが窺える。また、事業地内の集落についても表1の通りであり、罹患率が平均で88%を超えており、斃死率にいたっては同70%以上という驚くべき数値であった。台拓の社員が駐在する事業地では斃死率が50%を超えていないが、現地集落では十分な処置を施すこともできなかったためか、斃死率が異常に高い。

こうした惨状に陥る中、台湾では総督府獣疫血清製造所の血清在庫が全く足りていなかった。肝心の血清が不足しており、現地側は台北本社に南支課に対し、血清は「満洲国朝鮮ニハアル筈ニ付総督府ニ交渉ノ上送附手配乞フ」<sup>25)</sup>と、緊急の対応要請を出していた。しかし、満洲国政府や朝鮮総督府を通じて手配するには、その手続きや輸送に相当な時間を要するため、本社側としても「満洲及ビ朝鮮ヨリ血清購入ハ手配セザリシモノナリ」<sup>26)</sup>と、現実的な回答しか出せなかったのである。結局は、台湾で急遽血清を製造し、確保できた分から順に現地へ輸送することが最善の方策であった。しかし、それでは収束させるには到底間に合わず、業務部長高山三平から副社長久宗董宛の電報で、現場では「血清入手不可能ナル為殆ト救助ノ方途ナク臨機屠殺ニ依リ損失ノ軽減ヲ策スルコトトセリ」<sup>27)</sup>と報告されるように、まさに危機的状況だったのである。

## Ⅱ. 牛疫発生の原因追及

### 1. 今後滋雄が記した現場の実態

牛疫の惨状とその後の対応については、今後滋雄が作成したと思われる台拓の社内文書「家畜防疫計画」(1942年2月)と、彼が業界誌『現代之獣医界』に寄稿した「随想・海南島の牛疫」(1942年5月)からそ



図1. 海南島地図

出典：東亜地理調査会編纂「最新詳細海南島大地図・改訂第四版」(合資会社日光堂、1942年3月)／台湾総督府内務局土木課「海南島全図」(南方資料館、1943年8月)、より筆者作成。

の実態を探ることができる。「家畜防疫計画」は、牛疫拡大に伴い、1942年1月14日に南支課長(長谷場純熊)名義で海口支店長(河原英二)と三亜事務所長(高木秀雄)宛で、「海南島家畜防疫対策樹立ニ関スル件」(支第38号)と題する予防ガイドライン作成指示を出したことが背景にあった。そして、これを受

けて、おそらく今後滋雄であろうが、彼が現場の声をまとめて三亜事務所長に上げ、2月23日に三亜事務所長から南支課長へ送付されたものである。この計画書では、牛疫拡大の要因となった他社の当事者や軍機に関わる部分は「○」を使って伏せられているが、人為的な事故とも言うべく疫情の様子が概ね

表1 台拓事業地管内集落の牛疫発生状況

	水牛					黄牛				
	飼養頭数 (A)	罹患頭数 (B)	斃死頭数 (C)	罹患率 (B/A)	斃死率 (C/A)	飼養頭数 (A)	罹患頭数 (B)	斃死頭数 (C)	罹患率 (B/A)	斃死率 (C/A)
加卜仔下村	86	62	52	72.1%	60.5%	74	70	60	94.6%	81.1%
進士村	10	8	4	80.0%	40.0%	4	4	4	100.0%	100.0%
石井村	60	60	54	100.0%	90.0%	49	49	43	100.0%	87.8%
鼓樓村	202	200	180	99.0%	89.1%	140	120	100	85.7%	71.4%
深田村	70	59	59	84.3%	84.3%	62	58	50	93.5%	80.6%
軍屯村	39	28	20	71.8%	51.3%	40	30	30	75.0%	75.0%
紅包村	50	50	30	100.0%	60.0%	60	40	30	66.7%	50.0%
文隆村	45	45	31	100.0%	68.9%	35	35	28	100.0%	80.0%
保境村	74	70	60	94.6%	81.1%	45	31	31	68.9%	68.9%
中央村	80	80	72	100.0%	90.0%	70	59	59	84.3%	84.3%
北溝村	60	60	54	100.0%	90.0%	40	30	30	75.0%	75.0%
八村	40	40	32	100.0%	80.0%	32	30	30	93.8%	93.8%
六田村	36	36	25	100.0%	69.4%	24	19	15	79.2%	62.5%
望天塘村	60	60	54	100.0%	90.0%	45	31	31	68.9%	68.9%
長田村	35	35	28	100.0%	80.0%	10	10	7	100.0%	70.0%
長坡村	74	70	60	94.6%	81.1%	60	40	30	66.7%	50.0%
塩灶村	40	40	32	100.0%	80.0%	36	36	25	100.0%	69.4%
樂安村	28	27	27	96.4%	96.4%	20	20	15	100.0%	75.0%
嶺頭村	40	40	32	100.0%	80.0%	32	30	30	93.8%	93.8%
灶仔村	70	50	45	71.4%	64.3%	49	43	36	87.8%	73.5%
大港村	45	45	31	100.0%	68.9%	36	36	25	100.0%	69.4%
右港村	39	28	20	71.8%	51.3%	20	20	15	100.0%	75.0%
卜昌村	74	70	60	94.6%	81.1%	60	40	30	66.7%	50.0%
演村	45	45	31	100.0%	68.9%	36	36	25	100.0%	69.4%
三馬林村	70	59	59	84.3%	84.3%	49	43	36	87.8%	73.5%
新村	50	50	50	100.0%	100.0%	49	43	40	87.8%	81.6%
分界塘村	49	40	31	81.6%	63.3%	16	16	14	100.0%	87.5%
加卜仔上村	70	53	53	75.7%	75.7%	62	62	48	100.0%	77.4%
計(平均)	1,641	1,510	1,286	91.9%	75.7%	1,255	1,081	917	88.4%	74.8%

出典：台湾拓殖株式会社档案「昭和十六年度海南島防獣疫関係綴南支課」(所蔵番号：002-01081)80～82コマ。

註：誤算と思われる箇所は筆者にて修正している。

確認できる<sup>28)</sup>。

他方、「随想・海南島の牛疫」では台拓側による対応過程がより細かく記されるが、上記計画書と同じく軍機に関わる部分や人名は「○」やアルファベットを用いて伏せている<sup>29)</sup>。また、敢えて「随想」としているだけに、これまで今後滋雄が別の論稿で見せたような独特な文学的表現が頻出し、それに加えて句読点も省いた長い文章で分かりにくくしていることもあってか、検閲側も本来は全文削除にすべき事態の重大さに気づいていない。極めて危険な内部告発であり、たとえ伏せ字があったとしても掲載されたのが不思議である。言論統制が厳しい中でも、随想として故意に分かりにくい文章に仕上げて自らの本音を伝えようとする現場社員の正義感と覚悟、そして自分には全く非が無いことをアピールし、むしろ被害者であるとして保身も図ろうとする必死の心情が伝わってくる。

この通り、計画書と随想の双方を比較することで牛疫拡大の背景を探ることができるが、今後滋雄の見解をまとめると、おもに以下5点の決定的問題を挙げていた。つまり、①現地での防疫意識の低さ・②初発時の誤った対応・③緊急連絡手段の不備・④血清輸送の遅延・⑤現地社員の技術不足、である。①～⑤はすべて関連しており、家畜の感染症は問題が起きた初期の適切な対応が重要であることは言うまでもないが、彼は特に初発時の軍部と他の受命企業が関わった杜撰な対応を悔やんでいた。その実態については、「随想・海南島の牛疫」にて細かく記される。伏せ字や独特な文章表現があるため読解は非常に難しいが、以下で重要部分を取り上げて彼の叫びに接近してみたい(原文の伏せ字部分は下線にて表記)。

去夏(1941年)八月私が本社へ出張中私の牧場から「三亜地方の水牛に疑似牛疫発生云々」を電報され私は督府高澤技師を訪ね血清の割愛を願ひ蒼惶として任地に帰つた特務部に挨拶に出頭した処が台湾の話では「どうも牛疫ではないらしい林兼商店(南方畜産)会社の獣医は水牛が酷暑に伴ふ外界の感作を受けた…疾病で此際余り牛疫だと言つて騒がぬ様に…」との希望があつた、帰所後片上義男技手の剖検記事を見たり、話を聞いたりまた之を手伝つた。呂鑑鹿獣医の話では水牛独特の疾病で

はないとか種々意見も出た、実物を見た訳でもなく七信三疑の儘終熄したが、私が在社中高澤技師の御指示に依る毒血が資材不足で採血、荷造が出来ないとのことで其儘となつてゐるのに驚いて急いで空送したから之に依り真疑が判明するものと只管其の結果を待つた、そして私は他社の獣医に対しても軍部に対しても何も言はなかつた<sup>30)</sup>。

原文ママ、下線・丸括弧筆者

牛疫拡大の原因とされる重要部分について、今後滋雄は上記の通り訴える。ここで注目されるのは、問題の隠蔽や軍部への付度、および有事の際に備えた危機管理の不備など、担当事業を下命する軍部と担当事業を受命する会社の間で特殊な関係が生まれ、こうした組織の力が作用して引き起こされる諸悪を内部告発していることであろう。今後滋雄が感染拡大の根源と決定づけたのは、海南島南西部の崖県で屠畜事業を担っていた林兼商店の社員だと思われる<sup>31)</sup>。林兼商店は「南方畜産」として活動していたとされるが<sup>32)</sup>、南方畜産については詳細が不明であるため、一応丸括弧で併記している。この林兼商店については、随想の他の箇所にも、「林兼商店(南方畜産)会社が屠牛として崖県に牽付くべき牛群中に罹病牛が相当混入して、それが各沿道を病毒を播きつ、通過したのだから助らない(原文ママ)」<sup>33)</sup>と、似たような内容が見られた。

では、牛疫拡散の経緯としては、前年12月頃に東方の万寧県下で牛疫と思われる罹患牛が大発生しており、林兼が万寧で畜牛買付を行い、屠殺のために罹患牛も混載して崖県へ運搬し、その際に台拓事業地を通過するためにウイルスが拡散したと思われる(各地の位置については図1も参照)<sup>34)</sup>。罹患した牛は、外見から異常な症状が分かるはずであり、罹患牛を運搬したのは屠殺後の販売利益を優先した故意の行動であろう。そして、今後滋雄は事実隠蔽も求められたが、それには以下の背景が想定できる。

つまり、林兼側からすると、受命事業で軍部を巻き込むような過失が生じれば、最悪の場合は事業運営停止を命じられ、名誉や社益にも影響を及ぼすことは当然である。また、当事者も失職して兵役に服さなければならない可能性がある。牛疫が拡散すれば、近隣で事業を運営する同業者の台拓も不利益を被ることになるため、林兼は自社の都合および軍部



や他社との関係も鑑みて、当事者を中心にとりあえず隠蔽して事態の収拾に努めたかったのだろう。そして、林兼側は台拓の事業地でも牛疫と思われる事案が生じた情報を入手し、ちょうど台拓側責任者の今後滋雄が本社出張中ということを知り、台拓本社に「牛疫ではない」と虚偽の報告をした、あるいは隠蔽の口合わせをするよう懇願していたのではなかろうか。本社出張中の今後滋雄は、片上義男技手から「擬似牛疫発生」<sup>35)</sup>との急報を受けたが、問題を大きくしたくない本社側からも「牛疫だと言って騒がぬ様」求められており、また海南島に戻った際も検証結果が確定していないため、海南海軍特務部に対して明確に「牛疫発生」と口に出せなかったのではあろう。

もちろん、台拓としても、検証結果が明らかになっていない段階で、自社の事業地で牛疫が発生したと公表できるはずがない。軍部との関係もあるので、事故の真相が定かではない状況では、とりあえず「隠蔽」しておくことを選ぶのは会社上層部の判断として十分考えられる。今後滋雄に対して口止めの圧力があったのは確かであり、目先の社益という点から見て、隠し続けることが台拓と林兼双方にとっても都合が良かったのである。筆者が想定するのは、以上の背景である。

## 2. 競合他社に対する疑い

随想に記された今後滋雄の文脈からは、上記のような隠蔽経緯が想定される。しかし、後に台拓事業地でも本格的に感染拡大するに至って、今後滋雄自身の責任も問われかねない状況になり、耐えきれずに東京の現代之獣医社に随想を寄稿し、業界誌上で可能な限り内情を漏らして潔白をアピールしたのであろう。それはある意味、必死の保身でもあったのである。筆者が各史料から読み取る今後滋雄の慎重で几帳面な性格から見て、牛疫の可能性が極めて高いにも関わらず、事業を与えてくれる軍部に付度する受命会社の組織の力によって真実が封印されたことは、非常にもどかしかったのだと想起される。

元凶と思われる漁業界の大手・林兼商店は、日本軍が進出する以前から現地での事業展開を画策していた<sup>36)</sup>。陸海軍が本格的に上陸した後、1939年2月24日には調査員を派遣し、南部の「楡林を南支那海

の機船底曳漁業の根拠とし製氷冷蔵庫の新設を企画」<sup>37)</sup>していたという。軍部の動きに敏感に反応し、台拓とはほぼ同じタイミングで現地へ人員を派遣し、漁業及び関連事業への参入を狙っていたとされるが、後に畜肉加工も手掛ける背景には、高性能の冷蔵設備・技術を有していたことが大きかった。林兼の冷蔵設備は、後に触れる台拓の新防疫計画においても、血清保管のために借用したいと信頼が寄せられており、台拓には到底及ばない強みであったことが窺える。占領後の調査を経て、本業の漁業だけではなく副業の畜産部門にも参入したが、台拓の社内報告では重大事故を引き起こすべく、その拙劣な業務実態が指摘されていた。

三亜の台拓事業地で牛疫が発見される約2ヶ月前、1941年6月25日付で台拓海口支店長の河原英二は、南支第二課長(長谷場純熊)宛で林兼の様子を報告している。そこでは、「社員ノ言ニ依ルニ林兼ノ専務ガ畜産事業ニ興味ヲ有シ満洲ニテモ経営シツ、アル、田中ノ懇請ニヨリ社長ニ内密ニテ資本ヲ提供シ遂ニ流レ込ムニ至リタルモノニシテ社長トシテハ事後之ヲ承知シ極メテ不機嫌ナリシト云フ」<sup>38)</sup>と、競合他社の内部事情が綴られる。ここで挙げられる「田中」とは、主に畜肉・皮革を扱う大阪の業者「田中商事」を指していよう<sup>39)</sup>。田中商事は1939年9月にはすでに海南島に進出していたが<sup>40)</sup>、林兼の専務が畜産事業に興味があることを知り、冷蔵設備を有する林兼に事業譲渡の話を持ちかける。その結果、林兼の専務は社長に話を通さず独断で海南島向けの資本提供を決めて進出し、後からそれを知った社長は立腹していたという。おそらく、とにかく素早い行動が重視される占領地事業の獲得において、社益のためにも先に既成事実を作っておこうとする専務の思惑により、社長と対立するに至ったと思われる。

ちなみに、1941年1月22日から2月1日の行程で海南島を視察した「支那通」神田正雄の報告によれば、1940年10月時点で田中商事の畜産事業は「中途廃止」と記されている<sup>41)</sup>。したがって、先の林兼側との交渉は、その前後の話であろう。そして、既述の通り、田中商事と林兼商店は事業譲渡で合意するが、河原の報告では、「林兼ハ最近満洲事業部ヨリ畜産技術員ヲ招致シ業務ノ改善ヲ策シツ、アルモ元田中商事ヨリ継承セル職員ト林兼本来ノ職員トノ間ニ絶ヘズ意見ノ衝突或ハ摩擦アリテ是等ノ整理完了セザレバ

業務ノ改善モ不可能ナリト称セラル」<sup>42)</sup>、とも指摘される。林兼の現地社員にとっては上層部が決定した急な話であり、事業運営の方策をめぐり元田中商事社員との間で混乱が起き、双方の溝が深まっていたという。占領地利権・利益最優先で突き進む上層部の意向に現場社員が翻弄されるという、受命企業のお家芸とも言うべき醜態が明るみになっていた。実際に現場では、「林兼ノ畜産物ニ就テノ業務状況ハ単ニ其ノ名義ヲ存続スル程度ニシテ極メテ消極的」であり、そのためか「牛皮ノ如キモ海軍本省ハ葉乾皮トシテ納入スルコトヲ希望セラレ居モ今以テ塩皮トシテ納入シツ、アル状況ナリ」<sup>43)</sup>と、台拓側から見ると技術的にも目に余る実態であった。

今後滋雄も、崖県での屠畜においては「有経験獣医ナク誤診シタル」<sup>44)</sup>と厳しく譴責しており、林兼は現地社員の技術水準も然り、事業獲得のために招集し得る人員をとりあえず揃えて形式だけ整えるという、羊頭狗肉的な運営が目立っていた。こうした経緯も斟酌すると、今後滋雄が諸悪の根源と断定し、敢えて伏せた重要な社名部分には、林兼商店あるいは南方畜産が入ることが最有力であり、より限定するならば元社員という意味で田中商事ではなかろうか<sup>45)</sup>。ただし、牛疫発生時点で田中商事の事業は廃止となっているため、同社の可能性は極めて低いと思われる。

### Ⅲ. 牛疫拡大と会社の対応

#### 1. 拡大する牛疫

初発時の過失がもたらした影響は大きく、1941年11月11日からは本格的な第二波に見舞われる。今後滋雄は随想中で、続けて以下の通り訴えた。

十一月十一日陵水の後藤北面技師から電話が来た「水牛が死ぬから誰か至急出張せしめられ度し」と直に軍用トラックに便乗せしめて北野隆能獣医を同地に出張せしめ私は三亜の会議に出席した、然るに北野隆能獣医は「曩に三亜に流行した疾病と同一型のものなることを報じて来たので、新村分場とは僅か二〇K位の近距離であるので「伝染病は重きに依り措置処断」すべきに付き直に本社に対し血清を要求した、更に淡水(総督府獣疫血

清製造所)になき趣に付朝鮮、満洲国から割愛方を督府に御願する様三亜へ電話したが其時から生憎電報取扱中止の厄難に遭ひ、一方新村分場にも水牛一頭発病の報に接し茲に愈「最悪の場合到来」を予感した。当時新村分場の中原忠一技手は病氣入院片上義男技手は内地帰省中にて交通、通信関係何れも制限され放牧地帯の警戒島民に対する布告、預牝牛の増加、分散飼育に依る被害の軽減等種々の方策を実施したが燎原の火の如き病勢は既に新村分場の周囲一帯を嘗め本牧場(簾橋牧場)迄飛火するに至つた<sup>46)</sup>。

原文ママ、下線・丸括弧筆者

第二波への拡大経緯については、以上の通りであった。11月12日には後藤から南支課長(長谷場純熊)宛に電報を打ち、牛疫発生の報告と至急血清5,000ccを空送するよう要請している。翌13日には、今後滋雄から同じく南支課長宛に電報を打ち、血清10,000ccを送るよう要請していた<sup>47)</sup>。しかし、台拓本社側は総督府獣疫血清製造所に対し、電話で血清5,000cc購入の旨を伝えたところ、「在庫血清ハ1,000ccシカ無ク本月末頃血清製造ノ予定」であり、「不取敢1,000ccノ購入手配ヲナシ残余ノ4,000ccハ血清出来上リ次第購入スルコト、致シ度」<sup>48)</sup>という、絶望的な状況だった。本社側もこれまで危機管理を怠ってきた緩みが露呈されたのである。11月28日付で簾橋牧場側から南支課長宛で、既述の通り満洲国や朝鮮から血清を取り寄せるよう総督府に交渉してもらいたいとの要請も出したが、それも非現実な願望に終わっていた。結局、血清は総督府獣疫血清製造所長でもある高澤に頼るしか無く、「消防夫(血清の意)ヲ台湾ヨリ招聘スルガ如キ状態ニ陥リ」<sup>49)</sup>、しかもその「消防夫は台湾にも不充分、輸送も通信も軍機の関係で意の如くならないといふ様に最悪の条件が累積」<sup>50)</sup>したのであった(下線・丸括弧筆者)。

現場人員についても、中原忠一や片上義男が不在で北野隆能しか頼れる人がいなかったであろう。しかし、北野は獣医免許を取得してから2年半も経っておらず<sup>51)</sup>、現場経験の不足から今後滋雄は物足りなさを痛感していたと思われる。そこで、海南海軍特務部に対し、旧知の仲である黒河正技師(台湾総督府殖産局農務課技師)の海南島派遣を請願し<sup>52)</sup>、力のある人物を緊急招聘することで事故処理にあ



たった。被害状況については既述の通りであり、不幸にも会社事業に莫大な影響を与える事故の当事者となってしまった今後滋雄は、「会社に対しては責任を感じて骸骨を乞ふたが許されなかつた」<sup>53)</sup>と、現場の管理不十分を理由に辞職を願い出ていたのである。

## 2. 今後滋雄が訴えた自身の限界

これまで見てきた通り、平時の危機管理の不徹底のみでなく、事故発生時の杜撰な対応や組織ぐるみの隠蔽工作、事故発生後の連絡系統の不備、血清の不足、そして高度技術人員の不足などが重なり、最悪の事態に発展していた。資源獲得という目的が先走る中で、関連規則の整備も不十分であり、無法地帯に近かったのである。今後滋雄からすれば、もちろん競合他社の杜撰なやり方に対する不満もあったが、軍部や自社の方策に対する不満もあった。彼は、「各位は嘸かし我々の計画を没常識視或は無暴と見られるに違ひない、私自身も立場を代へて考へた時には一応斯様に感得されるのである、しかしそこには左様に簡単に葬り得ないだけの基礎調査も遂行し当初計画の変更も行つたのである(原文ママ)」<sup>54)</sup>と、既定の会社方針に従う中で可能な限りの対策は講じていたとする。

先に見た台拓の牧畜事業計画については、「三省会議ノ御指示ニ基キ企業二十年後ニ於テ家畜十萬頭ニ達セシムルコトヲ目標」<sup>55)</sup>としていたが、この計画には「牛疫ノ防遏ニ対シテハ寸毫ノ考慮ヲ払ハレタル跡見ル能ハザリシ」<sup>56)</sup>と、致命的な欠陥があった。入社後に危機管理に欠けるプランを手にとった今後滋雄は、有事に備える体制を作るべく、会社に片上を採用してもらい、総督府獣疫血清製造所で研修を受けさせていた<sup>57)</sup>。そして、「小職赴任後一応当地方及其附近ニ於ケル発生状態等調査」<sup>58)</sup>していたが、大きな問題は無かったという。さらには、1940年11月8日から12月24日まで山根甚信(台北帝国大学理農学部教授)が海南島の畜産事情を調査した際に今後滋雄も随行していたようだが、そこでの報告書でも、「少クトモ現時獣疫ノ大規模発生ハ無キモノノ如ク、現ニ海口ノ水垣食品工業公司及崖県ノ林兼商店ニ於テハ黄牛ヲ肉用トシテ遠地ヨリ買集、輸送シ数百頭ヲ一群トシテ狭キ構内ニ繋養セルニ

拘ラズ、開業以来未ダ此災厄ニ冒サレタルコトナシト謂フ」<sup>59)</sup>と、現段階では安全であるとの神話が確立されていた。

今後滋雄からすれば、島内の畜牛は南部から北部へ流れるために自社事業地は牛疫リスクが少ないという好条件があり、また新入社員に対する獣疫研修も手配し、可能な限りの備えは怠っていなかった。しかし、既述のとおりこれより前に牛疫が発生していたにも関わらず、なぜか山根の調査では牛疫が発生していないとの不正確な情報が共有され、変に安心感を煽る結果となっていた。また、肝心の血清も現地で十分に常備されていなかったため、対応が後手に回ることとなった。これについては、本来血清製造も業務項目に掲げる畜産改良試験所の運営が台拓に委嘱されることになっていたが、先に触れた第2回農政委員会での「決議ニ基キ該試験所ハ同委員会自営ノ事ニ決定」<sup>60)</sup>したことが大きかっただろう。たしかに、軍政下の制約がある中で本社も有事に備えた方策を自由には実施することができないが、総督府を通じて積極的に対策をしておく必要があった。今後滋雄が片上を研修に派遣したのは、なかなか動かせない組織の方針を目の前にして、会社上層部に対する最大限の訴えでもあったのである。

軍政下での危機管理に課題があった中で、台拓の牧畜事業は1941年から「積極的ニ増殖ニ着手スルニ至レリ」<sup>61)</sup>、事業は順調に進展するはずだった。しかし、最悪の事態が起き、いざ問題が起こると組織の力によって早期の原因解明と事態解決に向けた動きが滞り、海南海軍特務部も当初は、「如斯伝染病ノ経験技術者ヲシテ再診セシムルノ慎重サヲ欠キ徒ラニ流行スルガ儘ニ放任シタル」<sup>62)</sup>と、逃げに走ってしまった。軍部は事が大きくなるとようやく、籐橋牧場側からの「要求例ヘバ畜牛交通遮断ノ実施ニ依ル無病地帯汚染防止、技術員ノ派遣血清及器具、病毒薬品ノ配給等多大ノ便宜ヲ附与」<sup>63)</sup>したのである。軍部と受命会社が癒着する中で、資源や利益の獲得という目先の目的だけが暴走し、占領地事業を支えする人員や資材の準備徹底を欠き、現時点での根柢の無い安全神話や楽観的予測に胡坐をかくという、問題の決定的本質であった。

### 3. 新防疫計画の作成

今後滋雄が告発する現場の実態では、海南島事業を司る軍部や会社への補助金給付を決める総督府をはじめ、総督府獣疫血清製造所長の高澤壽や山根甚信台北帝大教授など、台拓上層部にとって自社の利権に関わる組織名や人名が続々と判明する。南支課では、今後滋雄が作成したと思われる計画案を参考にしつつ新たな防疫方針を策定するが、こうした自社事業をバックアップしてくれる関係にある組織や人物への批判に繋がる文言は、そのまま書けるはず

がない。したがって、「台拓」という看板を背負う南支課としては、軍部や総督府等にも送付する計画書ということを念頭に置いて、関係筋への不満・批判と見做される文言は徹底的に削除し、差し障りのない方針としてまとめる必要があった。

そこで、南支課が中心となって作成した新計画は、表2の通りまとまった。原案の文言を汲み入れた部分は太字・二重下線で示しているが、この計画書の特徴として以下のことが言える。つまり、軍部にとって都合の良い部分だけを引用し、逆に都合の悪い部分は一切採用せず、また台拓の監理官たる総督府に

表2 台湾拓殖株式会社「秘・海南島防疫計画」(1942年3月10日)

趣旨
海南島ハ当初ノ予想ニ反シ最近頻々トシテ牛疫発生シ吾社南部事業地モ本疫ノ侵襲ヲ受ケ多大ノ損害ヲ蒙リタル実情ニアリ其他炭疽、豚コレラ等各種家畜伝染病モ亦四季発生アルモノト予想セラルルヲ以テ之ガ防遏対策ノ確立ハ刻下ノ急務ナリ而シテ是等獣疫ノ防遏ハ血清並予防液ニ依存スル外手段無キモ従来ノ如ク発生ノ都度台湾ヨリ送附スル方法ハ製造時期及ビ輸送関係等ノ為兎角遅レ勝チニシテ臨機ノ処置ヲ失スル処アリ
<u>仄聞スルニ海軍特務部ニ於テ昭和十七年度ニ獣疫血清製造所ノ設立計画アルモノノ如キモ吾社自体トシテ再ビ過去ノ轍ヲ踏マザル様之ガ完成マデノ不取敢ノ自衛策トシテ左記方法ニ依リ獣疫血清並ニ予防液ヲ現地ニ於テ常備シ置キ獣疫ノ発生蔓延ヲ未然ニ防止セントス</u>
一、職員
海口畜産部及ビ籐橋牧場ニ於ケル現従業職員ヲ以テ之ニ当ラシメル予定ナレバ人件費ヲ計上セズ
二、防疫用獣医器具
<u>顕微鏡・解剖刀・注射器(1cc～100cc)・注射針(1cc～100cc)等</u>
計985円66銭
三、血清及予防液
<u>(イ)牛疫血清・牛疫予防液・豚コレラ血清・豚コレラ予防液・炭疽免疫血清・炭疽予防液第二苗・炭疽診断液・家禽コレラ血清・ツベルクリン</u>
計6,085円
<u>(ロ)獣疫血清及予防液ノ保管ニハ間断ナク冷温ヲ保持セシメル為断ヘズ氷ノ補充ヲ必要トスルヲ以テ氷ノ入手関係、交通関係、事業地関係経費等ヲ顧慮シ保管場所ハ南北ニケ所ヲ適当トシ南部ハ榆林林兼製氷工場、北部ハ海口吾社製氷工場ノ一隅ヲ賃借シ必要ニ応ジ隨時搬出シ得ル方法ヲ講ゼントス</u>
四、薬品及消耗品
<u>枸橼酸ソーダ液・昇汞・石灰酸・生石灰・クレオリン・クレゾル石鹼液・レビーゲル氏染色液・ギムザ氏液・チエーテル油・キシロール等</u>
計316円89銭
五、所要経費
<u>器具費・血清及予防液費・保管費・薬品費・運搬諸掛費</u>
計7,559円55銭

出典：台湾拓殖株式会社档案「昭和十六年度海南島防獣疫関係綴南支課」(所蔵番号：002-01081)28～32コマ、より筆者作成。

対しても如何なる悪影響が及ばないような「付度」が目立つことである。必要資材など技術的な部分は当然とも言うべき内容となっているが、注目すべきは「趣旨」であろう。

冒頭部分の、「海南島ハ当初ノ予想ニ反シ最近頻々トシテ牛疫発生シ」という文言は、原案には記されていない。原案では既述のとおり、むしろ危機管理の欠如を訴えていた。しかし、会社としても危機管理を怠っていたと堂々告白すれば、台拓事業に関わる軍部や総督府の批判にも繋がりがねないし、自分たちの汚点も晒してしまうことになる。そこで、今回の問題については、あくまでも現地の生態環境に起因する「予想外の事故」であると、台拓のみならず軍部や総督府の責任も一切問われないような体裁に調整していた。こうして、現場の人員から見れば、林兼の対応以外にも、当初の事業計画策定やその後の対応に関わっていた軍部と総督府にも原因がある人災でもあったが、会社上層部の軍部と総督府に対する付度もあり、予想外の事故であったという一言で事実隠蔽や責任追及放棄が達成されたのである。

海南海軍特務部に対しては、牛疫を「流行スルガ儘ニ放任シタル」との厳しい批判もあったが、こうした批判ももちろん直接に書けない。逆に、「仄聞スルニ海軍特務部ニ於テ昭和十七年度ニ獣疫血清製造所ノ設立計画アルモノノ如キ」と、軍部の対応を称えるような部分は原案の一文を巧みに引用し、十分な配慮を示していたのである。また、同じ失敗を繰り返さないように、海南海軍特務部主導の血清製造所が整備されるまでは、「不取敢ノ自衛策トシテ左記方法ニ依リ獣疫血清並ニ予防液ヲ現地ニ於テ常備シ置キ獣疫ノ発生蔓延ヲ未然ニ防止セントス」という、現場の声を採用した点は興味深い。おそらく、現場としては、仮に軍部が新たな措置を講じて、それが当初の予定通り正常に運用される確約が無いことは自明であった。軍部も林兼などとの関係があり、結局台拓としては血清を自分たちで常備するという自衛策が最も安全であった。自社で血清を用意するということを明記すれば、軍部に対しての気遣いになり、また自分たちにとっても有利な方策である。したがって、南支課担当者はこうした組織間の関係を崩すことなく、穏便に事案をまとめられるような部分は積極的に引用して文章を構成し、計画案

作成のために費やす作業時間を短縮させていたと言えよう。極めて効率的な手法である。

台拓の新たな防疫計画が完成してからおよそ3週間後、海南海軍特務部の要請を受けて総督府は、「昭和十七年三月二十九日府技師高澤壽ヲ同島ニ派遣、調査ヲ行ハシメ意見書ヲ海軍省ニ提出セシメ」<sup>64)</sup>、特務部が新設するとした血清製造所について高澤は技術的提言をしていた。特務部は事態が悪化してようやく認識をあらため、「将来ニ対シ改善スベキ要アルヲ感得」<sup>65)</sup>していたようであり、1943年には林兼の製氷工場がある楡林に血清製造所建設が決定し、翌年から製造を開始していた。しかし、「当初に於ける設備製造能力は最小限度のものであり何れも四千乃至八千ccのものであつた」<sup>66)</sup>とされ、その実用性についてはさほど期待できなかったことが窺える。もちろん、激化する戦況下では困難も多く、当初は生産能力拡充計画もあったが、資材の輸送に制限が生じる中で実行不可能になっていた<sup>67)</sup>。

## おわりに

1944年1月20日に総督府担当者と台拓上層部が集まった会合にて、高木秀雄(南方第三課長)は「牧畜ハ籐橋事業地デ行ツテ居マスガ先般全島ヲ襲ツタ牛疫ニ依リ1,000頭ヲ失ヒ現在牛五五〇頭、豚、鶏若干アリマスガ牛疫対策ガ確立スル迄ハ積極的ニハヤラナイコトニシテ居マス、寧ろ此ノ事業ハ政府デアルベキダト思ツテ居マス(原文ママ)」<sup>68)</sup>と、現状を報告する。高木の報告を見ると、結局は海南海軍特務部と台拓の防疫方針が功を奏しておらず、課題を克服できないままだったということになる。牧畜事業はいまだに牛疫対策が確立しておらず、この事業は政府でやるべきだと限界も漏らすほどであり、戦況の悪化も関係してか有効な策が実行できない状態だった。

しかし、この会合が開かれた時、じつは今後滋雄はすでに海南島を去っていた。南方進出が本格化する中、台拓関係会社の台湾畜産興業株式会社は、小スンダ列島事業所(バリ島・デンパサル)が畜肉加工や原皮蒐集などの業務遂行を軍部から下命されていた。海南島で牛疫対応に奔走した今後滋雄は、新防疫計画が決定した約4ヶ月後の1942年7月11日付で本社業務部南洋課勤務への異動が発令され<sup>69)</sup>、海南島



配属が解かれた。彼は重大事故の当事者であったため、本社は一旦南洋課付にし、次の配属先を探したのである。そして、同年9月22日に台畜の嘱託社員兼海軍嘱託として小スンダ列島事業所長に就任する<sup>70)</sup>。彼は、牛疫問題の現場監督責任を問われたのか、あるいは牛疫問題の内部事情を誌上で告発したことで軍部や総督府、本社の逆鱗に触れたのか。これまでの経緯を考えると、明らかに南方に「飛ばされた」とも見える人事であった。

今後滋雄は随想の末尾で、「私は更に再び計画を変更し主畜農業の形態を強化し僅か一回の牛疫で事業を挫折するが如き醜態じを演ないであらうことを茲に附記し度いのである(原文ママ)」<sup>71)</sup>と意気込んでいたが、その志も半ばで終わり、53歳で関係会社の南方受命事業の現場責任者となったのである。彼は正義感が強いためか、組織の中で求められる相応しい言動に欠け、煙たがられる存在だったのかもしれない。本社側の意向としても、軍部や総督府との関係も考慮して、口うるさいトラブルメーカー的な社員はそのまま同じ部署に配置しておくのは危険であり、また牛疫拡大の引責や南方での技術者求人という事情もふまえて、最終的にバリ島への異動を指示したのではなかろうか。

本稿で扱った海南島牛疫は、今後滋雄の独特な文脈で語られるように、国策代行機関ゆえに生じる複雑な人為的要因が内在していた。占領地事業では莫大な利権が動く中で、軍部と台湾総督府および台拓経営陣との間で生まれる付度関係や、それに起因する万が一の有事に備えた危機管理の欠如、そして有事の際の決定的な隠蔽工作など、組織の力が作用することによって生じた「人災」という側面は看過できない。現場の技師である今後滋雄が訴えたかったのは、科学や技術の力を抹殺してしまった組織による政治的圧力だったと思われる。それはまさに、日本の占領地政策失敗の決定的要因でもあり、随想という形でそうした内部事情を告発することだけでも勇氣ある行動であった。今後滋雄が最大の工夫を凝らして記した海南島の牛疫問題には、あらゆる「失敗の本質」が集約されていたのである。

彼は終戦後に無事引き上げると、京都市内の家畜市場で職を得<sup>72)</sup>、居住地も京都府や大阪府内を転々としていた<sup>73)</sup>。戦後も官庁や大企業の要職に就いた旧外地の帝大卒技術者とは異なり、自身の専門分野

である畜産業に身を置き、細々とその後の人生を送っていたのではなかろうか。彼の戦後の詳細については不明な部分が多いが、晩年は郷里から比較的近い京都府熊野郡久美浜町(現京丹後市)で過ごし、御年88歳で激動の人生を終えていた<sup>74)</sup>。今後滋雄は戦中に内部告発という罪を犯した反省からか、戦後は雑誌等で多くを語らず、牛疫問題の全貌も明かしていない。むしろ、影を潜めていた感さえある。彼が戦中に残した言説の真相や現場の更なる詳細な実態など、これからも新たな史料発掘に期待しつつ、検証を続けていきたい<sup>75)</sup>。

## 謝辞

本稿執筆にあたり、松本大学からは研究費助成を受けた。また、松本大学図書館職員の皆様には、史料調査・複写等で多大なる御協力を賜った。茲に特に記して御礼申し上げたい。

- 1) 山内一也『史上最大の伝染病・牛疫―根絶までの4000年』(岩波書店、2009年8月)。なお、近年の成果として、アマンダ・ケイ・マクヴェティ著、山内一也訳、城山英明協力『牛疫―兵器化され、根絶されたウイルス』(みすず書房、2020年5月)も参照されたい。
- 2) 日本との関係では、これまで陸軍登戸研究所と朝鮮総督府家畜衛生研究所による散布用乾燥粉末病毒開発が多くに関心を集めており、戦後の関係者による回想からもその実態が明らかにされている。久葉昇「前大戦間に行なった牛疫研究について」『日本獣医史学雑誌』第38号、2001年2月、35～37頁。ほかにも、伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』(芙蓉書房、2001年1月)95～105頁／渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦―科学者たちの戦争』(吉川弘文館、2012年2月)81～91頁、など。
- 3) 本稿で扱う海南島については、開発が遅れていたという背景もあり、日本側による各調査報告にて牛疫の危険性が頻繁に言及されている(註18・19も参照されたい)。
- 4) 台湾総督府外事部編『南支那総覧』(南方資料館、1943年2月)1082頁。
- 5) 台拓の海南島事業については、Justin Adam Schneiderと鍾淑敏の研究にてその外郭が確認できる。また、柴田善雅は日系企業による海南島事業の概要を整理し、台拓の地位や台湾色が濃い海南島事業の特徴が把握し得る。Justin Adam Schneider, *The Business of Empire: The Taiwan Development Corporation and Japanese Imperialism in Taiwan, 1936-1946*, Michigan: UMI, 1998, p.229-309／鍾淑敏「台湾拓殖株式会社が海南島事業の研究」『台湾史研究』第12巻第1期、2005年6月、73～114頁／柴田善雅「海南島占領地における日系企業の活動」、同『中国占領地日系企業の活動』(日本経済評論社、2008年2月)383～425頁。近年の成果では、湊照宏・齊藤直・谷ヶ城秀吉「国策会社の経営史―台湾拓殖から見る日本の植民地経営」(岩波書店、2021年3月)も参照。
- 6) 拙稿「戦時期海南島における台湾拓殖株式会社の事業経営と牛疫問題」『日本獣医史学雑誌』第58号、2021年2月、53～72頁。前回の検討では十分な考察ができなかったため、ここでは修正すべき点なども含めて、あらためて当時の実態に接近したい。
- 7) 戦前期の今後滋雄の経歴については、以下を参照。台湾総督府公文類纂「今後滋雄台湾産業技師ニ任ス、補職」(所蔵番号: 00010056030X002)338～356コマ／同「今後滋雄(陸高等官三等ヲ以テ待遇セラル: 願ニ依リ本職ヲ免ス)」(同: 00010105012X001)74～78コマ／台湾総督府『府報』第647号(1929年4月20日)101頁／同第2154号(1934年7月18日)35頁／同第3171号(1937年12月27日)139頁／同第3382号(1938年9月9日)31頁／同第3907号(1940年6月8日)17頁／同第3909号(1940年6月11日)24頁／台湾拓殖株式会社档案「昭和十五年職員異動関係書類人事課」(所蔵番号: 002-00476)122コマ／同「昭和十五年人事ニ関スル発令通知人事課」(同: 002-00482)521、792コマ／同「昭和十六年度人事異動通知経理課」(同: 002-01005)130コマ／同「台湾畜産興業株式会社人事復命書其他諸報告等関係雑件南方第二課」(同: 002-01741)256、645コマ／「台湾畜産会主催皇紀二千六百年記念牛疫記念碑除幕式概況」『台湾畜産会々報』第3巻第12号、1940年12月、17頁。
- 8) 西村巖の経歴については、拙稿「戦時期中国占領地における台湾拓殖株式会社の事業参入と台湾総督府―海南島占領後の畜産業を中心に」『社会システム研究』第40号、2020年3月、52～53、78頁、を参照されたい。
- 9) これまでの経歴は、既述の通り註7を参照されたい。
- 10) 前掲「今後滋雄(陸高等官三等ヲ以テ待遇セラル: 願ニ依リ本職ヲ免ス)」76コマ。
- 11) 高澤と柳本が中心となって敢行した調査については、前掲拙稿「戦時期中国占領地における台湾拓殖株式会社の事業参入と台湾総督府―海南島占領後の畜産業を中心に」も参照されたい。ここでの調査は、三省連絡会議からの要請を受けて総督府も動き、高澤の行動記録を見ると4月1日に台湾を出発して5月2日に帰台したとされる。台拓からは、関係会社の台湾畜産興業株式会社から本社嘱託として石森堅重・丸目長年・中谷宏の3名が高澤等に同行しており、畜産事業に参入するために高澤を中心として三省連絡会議との間で実務的な調整が進んでいた。
- 12) 台湾総督府外事部『支那事変大東亜戦争ニ伴フ対南方施策状況(改訂版)』(同、1943年12月)245頁。
- 13) 台湾拓殖株式会社档案「昭和十六年海南島ニ於ケル自動車運輸、建築、畜産、製氷、農林等事業概況南支課」(所蔵番号: 002-01096)54コマ／台湾拓殖株式会社『社報』第42号(同、1939年10月)8頁／同第46号(同、1939年12月)4頁。
- 14) 台湾拓殖株式会社移交台湾土地銀行経営档案「雑綴(2)」(所蔵番号: TDLB\_03\_04\_01302)18～61コマ。
- 15) ちなみに、業界誌『台湾畜産会々報』中の記事「台湾畜産会主催皇紀二千六百年記念牛疫記念碑除幕式概況」では、1940年6月8日に「今後技師台湾拓殖株式会社ニ入社ス」とある。しかし、神経衰弱病という理由で官吏を退職した同日に台拓へ入社するのは、若干疑問を感じさせる。台拓の「発令通知」で記される6月14日(発令日)が入社日ではなかろうか。前掲「台湾畜産会主催皇紀二千六百年記念牛疫記念碑除幕式概況」17頁／前掲「昭和十五年人事ニ関スル発令通知人事課」792コマ。
- 16) 前掲「昭和十五年人事ニ関スル発令通知人事課」521コマ。
- 17) 前掲「昭和十六年度人事異動通知経理課」130

- マ。
- 18) 高澤と柳本による報告では、「本島ニ於テハ我台湾ノ領台当初ニ於ケルガ如ク家畜衛生状態極メテ不良ニシテ特ニ牛疫ハ各地ニ猖獗ヲ極メ産牛奨励上直接ノ被害甚大ナル」と、その危険性が伝えられていた。台湾総督府技師高澤壽・台湾総督府嘱託柳本直士「秘・海南島畜産奨励計画案(附海南島ノ畜産)」(台湾総督府殖産局、1939年9月)22頁。
- 19) 加藤浩「海南島の畜産調査報告」、台北帝国大学『台北帝国大学第壹回海南島學術調査報告・第2班(農學班)』(台湾総督府外事部、1942年3月)295～296頁。
- 20) 同上。
- 21) 前掲『南支那総覧』1089頁。
- 22) 陸軍獣医少佐村本金彌・陸軍獣医少尉淡路正二・陸軍技師宮川文雄「広東省畜産の概要」『陸軍獣医団報』第372号、1940年7月、115頁。
- 23) 片上義男「海南島疑似牛疫発生に就て」『台湾畜産会々報』第4巻第11号、1941年11月、71～72頁。
- 24) 台湾拓殖株式会社档案「昭和十六年度海南島防疫関係綴南支課」(所蔵番号：002-01081)79コマ。
- 25) 同上、157コマ。
- 26) 同上、140コマ。
- 27) 同上、127コマ。
- 28) 本社の保管文書として残っている計画書は、筆跡から見て、おそらく今後滋雄の自筆のものではないと思われる。今後滋雄が現地で作成して本社に転送され、送られてきた草案を本社内の担当者が回覧用として社内用紙に転記したものであろう。文書の送付状に「伊佐」という押印があるので、転記者は南支課の伊佐吉人技手(獣医師)か、あるいは他の見習社員ではなかろうか。伊佐吉人については、前掲拙稿「戦時期中国占領地における台湾拓殖株式会社の事業参入と台湾総督府一海南島占領後の畜産業を中心に」69、82頁も参照されたい。
- 29) 今後滋雄が作成したと思われる社内の計画書草案でも伏せ字が使われていることから、随想中に多く見られる伏せ字についても、検閲時に担当者の判断で処理されたのではなく、軍部の目を警戒する今後滋雄が原稿執筆時に敏感な部分を加工していたと思われる。
- 30) 今後滋雄「随想・海南島の牛疫」『現代之獣医界』第37巻第5号、1942年5月、47頁。伏せ字部分の原文は以下の通り。①—○○○…「特務部」、②—○○○○…「林兼商店(南方畜産)」、③—K…「片上義男」、④—T…「呂羅麗」(Tは台湾人の意味か)、⑤—○○…「軍部」。今後滋雄の諸報告を判読する限り、元凶はおそらく林兼商店(南方畜産)が最有力候補であると思われる。その次に林兼と関係があり、本文中でも触れる田中商事であろう。ただし、可能性は極めて低いであろうが、林兼ではなく「台湾拓殖」というパターンも考えられる。その場合、海口にある台拓海口支店畜産部主事である宗村亮(獣医師、技師)あるいは今後滋雄と同じ職場にいる獣医社員が、会社上層部を通じて隠蔽工作を働いていたということになろう。
- ちなみに、海口は宗村を中心に高雄閩人材が目立ち、簾橋は今後を中心に台南閩人材が散見される。
- 31) 1940年11月8日から12月24日までの行程で海南島を視察した山根甚信(台北帝国大学理農学部教授)の報告書では、「現ニ海口ノ水垣食品工業公司及崖県ノ林兼商店ニ於テハ黄牛ヲ肉用トシテ遠地ヨリ買集、輸送シ数百頭ヲ一群トシテ狭キ構内ニ繋養セル」と記されており、島南部の屠畜事業は林兼商店が担っていたと思われる。台湾拓殖株式会社档案「昭和十五年度帝大山根甚信教授海南島畜産調査関係南支課」(所蔵番号：002-00792)99コマ。
- 32) 台湾総督府外事部「殖産局調査団報告書一其ノ十二(畜産)」(同、1941年9月)24頁。本現地調査は、台湾総督府農業試験所技師葛野浅太郎が1940年11月14日から12月23日までの行程で行ったものである。なお、南方畜産については、塚本義隆編『昭和十七年版・中国工商名鑑』(日本商業通信社、1942年9月)889頁、も参照。
- 33) 前掲「随想・海南島の牛疫」48頁。同じく伏せ字の部分は下線で示している。①○○○○…「林兼商店(南方畜産)」、②○○○…「崖県」。「崖県」の部分は、屠畜場近くの漢字二文字の地名ということも考えられる。
- 34) 1941年11月28日付で陵水農場長後藤北面が海南海軍特務部総監宛に提出した「牛疫発生ノ件報告」では、「万寧県下ニ於テハ昨年十二月頃大発生シ約一千頭以上斃死セシ模様ニテ之ヨリ察スルニ全地附近ヨリ病毒侵入セシモノト思料セラレ」と記している。こうした背景を整理すると、今後滋雄が作成したであろう計画書中にも他社の獣医がウイルスを近隣地域に拡散させたとする、随想と同様の伏せ字付報告があり、それは以下の通りである。つまり、「(昨年12月頃)万寧方面ニ於テ約一千頭ノ斃牛アルニ拘ラズ林兼商店(南方畜産)ノ獣医ハ気温ノ急変ニ伴フ非伝染性疾病トナシ屠殺用黄牛ヲ陸路牽付二百kmノ沿道ヲ斃牛ヲ出シツ、崖県迄到着シ恰モ雪中ノ道路ニ血ヲ流シツ、走リタルモノノ如ク判然ト猛毒ヲ散布シタルコト」という告発である(丸括弧筆者、下線は伏せ字部分)。他の社内報告(1942年10月、宗村調査)でも牛の収買について、「南方畜産ハ崖県、榆林及万寧ニ於テ収買ヲ行ヒツ、アル」との記述があり、前年に万寧で起きていた牛疫が台拓事業地に持ち込まれたとの筆者の想定は妥当ではなかろうか。台湾拓殖株式会社档案「自昭和十六年至昭和十八年海南島海口畜産部、簾橋牧場ニ於テ単寧及畜産調査関係書類南支課」(所蔵番号：002-02672)171コマ／前掲「昭和十六年度海南島防疫関係綴南支課」62、154コマ。
- 35) 片上から出張中の今後滋雄宛に電報が入ったのは、1941年8月30日となっている。前掲「昭和十六年度海南島防疫関係綴南支課」199～



- 200コマ。
- 36) 所謂「支那通」の神田正雄は、1941年1月22日に海口を出発して、2月1日に海口に帰着する行程で島内を視察している。彼は視察後の報告書にて、「林兼漁業会社ガ海南島ニ碇泊基地ヲ欲シテ居タノハ事変前カラノ事デアツテ陳済棠氏ガ広東省総司令デ居ツタ際ニ同会社ノ顧問弁護士カラソノ租借ノ交渉ヲ委託サレタコトガアツタ、一寸交渉ハ進メテ見タガ埒ノ明カナイ中ニ事変トナリ海南島ノ占領トマデ漕ギツケタノデ林兼会社ガ最も重要地点ニ冷凍魚工場ヲ設立スルノハ当然過ギル程ノ当然デアル」と、内部事情を記している。ちなみに、事変前の交渉は1934年頃であったという。神田正雄『海南島視察報告書』(1941年5月)49、83～84頁。
- 37) 大洋漁業80年史編纂委員会編『大洋漁業80年史』(大洋漁業株式会社、1960年12月)293頁。
- 38) 前掲「自昭和十六年至昭和十八年海南島海口畜産部、籐橋牧場ニ於テ単寧及畜産調査関係書類南支課」234コマ。
- 39) 田中商事はこれより前、大阪で「弘豚社」として牛肉卸業や関連料理業を営んでおり、1934年4月頃から台湾総督府殖産局農務課を通じて各州の斡旋を受け、台湾で黄牛の買付・屠殺・冷凍・移出を行っていたという。台北に出張所を設置し、岡田新次郎を出張員として派遣し、台湾牛肉の阪神方面の販路開拓に貢献したとされる。その後業務は一時休止するが、1936年からは「田中商事株式会社」として再び内地へ冷凍肉を移出し、その後は移輸出規則の制約もあり、海軍向け軍用肉移出に転換していたという。田中商事が海南島に進出した背景には、これまで軍用肉供出に協力していたことが大きかったのではなかろうか。台湾拓殖株式会社档案「昭和十四年海南島畜産事業認可申請関係南支課」(所蔵番号: 002-00424)84コマ／「雑報二・台湾牛肉の移出」『台湾之畜産』第2巻第5号、1934年5月、55頁／福井蹄枕「大阪弘豚舎が本島から黄牛肉を移入した動機」『台湾之畜産』第2巻第6号、1934年6月、5頁。
- 40) 1939年10月中に開催された三省連絡会議の決定事項にて、「田中商事株式会社ニ対シ本島南方地域ノ黄牛、水牛及豚ノ屠殺及該肉ノ冷凍業並ニ皮革業ノ実施ヲ認許」したと挙げられる。しかし、これより前の同年9月23日～25日に海口の帝国総領事館で開かれた第2回農政委員会にて、田中商事からは支配人であろう田中新蔵が出席しているため、この会議より前に事業運営権が確約されていたことが考えられる。「海軍南方軍政関係／海南島関係／海南島農業政策関係／分割1」(アジア歴史資料センター、Ref.B05013049000、海軍南方軍政関係／海南島関係／海南島農業政策関係(海I-2-5-1)(外務省外交史料館))12コマ／「海南島政務関係事項に関する件」(アジア歴史資料センター、Ref.C04121598400、陸支受大日記(密)第71号、昭和14年自11月21日至11月29日(防衛省防衛研究所))8コマ。
- 41) 前掲『海南島視察報告書』109頁。
- 42) 同註38。
- 43) 同上。
- 44) 前掲「昭和十六年度海南島防獣疫関係綴南支課」61コマ。
- 45) 1940年3月5日に、海南島農政委員会から台拓社長宛に送られた各社の事業地割当地図を見ると、この時点では陵水県内に「田中」とする事業地が台拓事業地と隣接して記されている。認許された事業やその指定地域から推測して、おそらく田中商事ではなかろうか。畜産事業をめぐる林兼との交渉は、1940年3月～10月ではないかと想像されるが、いずれにせよ田中商事単独での事業経営は短命に終わっていたことが分かる。牛疫が南東から南西へと拡大する中で、その中間に位置する台拓事業地では甚大な被害を受けていた。台湾拓殖株式会社档案「海南島文昌事業地農林畜牧事業開発関係綴南支課」(所蔵番号: 002-02575)227コマ。
- 46) 前掲「随想・海南島の牛疫」47～48頁。伏せ字部分の原文は以下の通り。①—○○…「陵水」、②—G…「後藤北面」、③④—T…「北野隆能」、⑤⑥⑦⑩—○○…「新村」、⑧—N…「中原忠一」、⑨—K…「片上義男」。ちなみに、北野を「T」と表記した理由は、姓が同じ「K」である片上と区別するために、名の隆能の頭文字をアルファベット化したことにある。
- 47) 前掲「昭和十六年度海南島防獣疫関係綴南支課」166、171コマ。
- 48) 同上、166コマ。
- 49) 同上、62コマ。
- 50) 前掲「随想・海南島の牛疫」49頁。伏せ字部分の○○は、「軍機」であると思われる。
- 51) 今後滋雄の書き方から見て、北野はおそらく現場経験がまだまだ乏しく、ベテランとは言えない技術水準にあり、事故処理にはなお力不足であったのだろう。「公示及辞令・獣医師及獣医免許証下付者」『台湾畜産会々報』第2巻第7号、1939年7月、28頁。
- 52) 随想中には「○○○にK技師の派遣方を依頼」したとの記述がある。「技師」とあり、また台拓の社内報告を見る限り、(海南海軍)特務部を通じた台南閩の黒河正(台湾総督府殖産局農務課技師)の招聘であったと思われる。前掲「随想・海南島の牛疫」48頁。
- 53) 前掲「随想・海南島の牛疫」51頁。
- 54) 同上、48頁。
- 55) 前掲「雑綴(2)」20コマ。
- 56) 前掲「昭和十六年度海南島防獣疫関係綴南支課」61コマ。今後滋雄は、牧畜事業は「昭和十四年ニ於ケル調査団ノ報告ニ基キ計画ヲ樹立」していたが、その計画が楽観的であったと指摘する。「昭和十四年ニ於ケル調査団ノ報告」とは、1939年10月下旬から実施された台拓の調査であり(班長後藤北面)、4月の高澤・柳本調査を指していないと思われる。
- 57) 前掲「昭和十六年度海南島防獣疫関係綴南支

課」61コマ。

- 58) 同上。
- 59) 同註31。
- 60) 台湾拓殖株式会社档案「昭和十四年度、昭和十五年度海南島畜産事業認可許可関係南支課」(所蔵番号：002-02509)57コマ。
- 61) 同註57。
- 62) 同上。
- 63) 同上、62コマ。
- 64) 前掲『支那事変大東亜戦争ニ伴フ対南方施策状況(改訂版)』247～248頁。
- 65) 前掲「昭和十六年度海南島防獣疫関係綴南支課」62コマ。
- 66) 大蔵省管理局『極秘・日本人の海外活動に関する歴史的調査―通巻第29冊・海南島篇』(復刻版：ゆまに書房、2002年1月)209頁。
- 67) 同上、208～209頁。
- 68) 台湾拓殖株式会社档案「昭和十九年一月台拓事業説明会記録資料課」(所蔵番号：002-01795)199コマ。
- 69) 台湾拓殖株式会社档案「発令通知(一)人事課」(所蔵番号：002-01136)535コマ。
- 70) 台湾拓殖株式会社档案「台湾畜産興業株式会社人事復命書其他諸報告等関係雑件南方第二課」(所蔵番号：002-01741)28、50コマ。
- 71) 前掲「随想・海南島の牛疫」51頁。
- 72) 日本獣医協会編『獣医師名鑑』(同、1950年10月)226頁。
- 73) 戦後の動向について詳細は伏せるが、居住地が京都府京都市上京区や大阪府枚方市、京都府京都市中京区と転々としており、1970年からは京都府熊野郡久美浜町に移っていたことが確認できる。1967年には、7月10日から8月23日まで、デンマークやオランダ等ヨーロッパ7ヶ国の畜産業を視察しており、精力的に活動していたようである。戦後の今後滋雄に関する記事の出典については以下の通り。『台湾協会報』第4号、1950年1月15日、4面／同第136号、1966年1月15日、6面／同第149号、1967年2月15日、4面／同第156号、1967年9月15日、1面／同第169号、1968年10月15日、6面／同第191号、1970年8月15日、6面／同第203号、1971年8月15日、4面。
- 74) 久美浜町企画課編『町報・くみはま』第231号、1978年12月、2頁。
- 75) 台拓事業地で拡大した牛疫も、林兼(南方畜産)の社員が台拓に対する妨害行為として、故意にウイルスを拡散させたことも考えられる。引き続き、検証を進めていきたい。